

Edges of the Rainbow

トークイベント

12/30 Sun 13:30 Start ~14:00

【会場】よろっとローサ 新潟市中央区古町通6 西堀ローサ内7番町側

特別という言葉は似つかわしくない。そこには、ただただ「深い愛」があるだけ、、、そう教えてくれる写真集。

アメリカN.Yに在住し、数々の賞を受賞しているフランスの写真家 Michel Delsol と、元遊○機械全自動シアター女優。

現在はN.Yで演劇や企画プロデューサーとして活動している篠崎はるく女史。

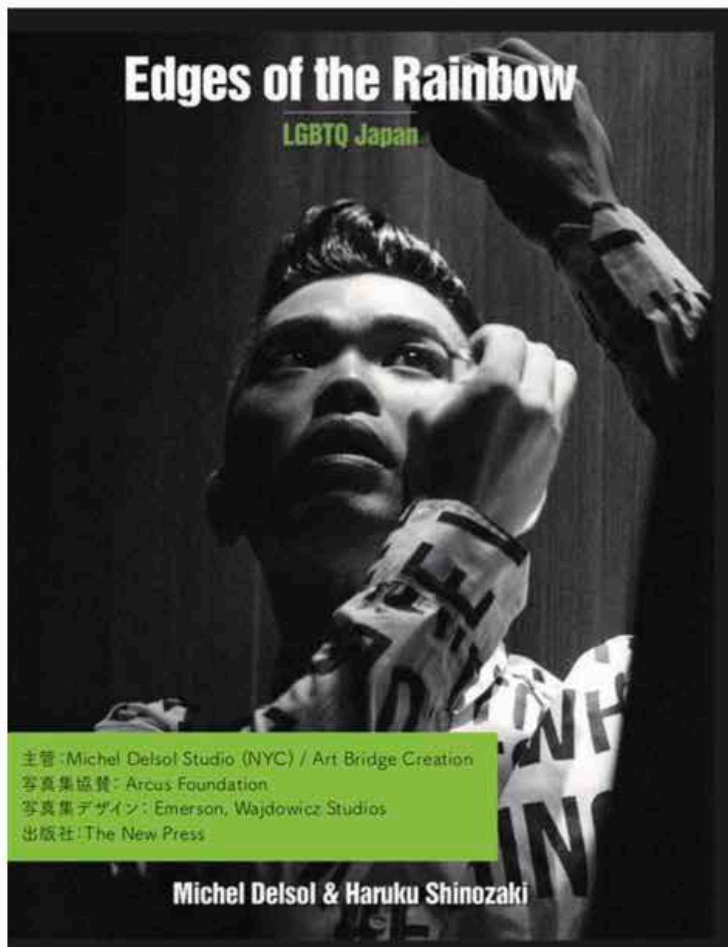
二人がわざわざ国境を越えてこの写真集“Edges of the Rainbow”を作り上げた意味とは、、、

フランス・イギリス等々、世界で高い評価を得て、2018年度の「TOKYO INTERNATIONAL PHOTO AWARD」を受賞しているこの写真集。今回日本に焦点をあて全国での被写体に選ばれたのは数名、有名などころではタレントのはるな愛さんをフューチャーし、密着撮影を敢行しているのも親しみ易い。

また、ナマラ企画の新潟LGBT48の監督役でもある高橋佳生さんも9人のうちの1人被写体として写真集に登場している。

写真集の中に登場するLGBTQの方々にも讚美の拍手を贈りたい1冊である。

この発売から2年目を迎えての写真展示会とその企画写真の被写体に選ばれた新潟の高橋佳生と、ナマラの江口代表がこの写真集の撮影時の想いについて語らう。



Edges of the Rainbow

LGBTQ Japan

主管: Michel Delsol Studio (NYC) / Art Bridge Creation
写真集協賛: Arcus Foundation
写真集デザイン: Emerson, Wajdowicz Studios
出版社: The New Press

Michel Delsol & Haruku Shinozaki

【出演】

love
peace
LGBT にいがた love1peace
高橋佳生

×

NAMARA 代表
江口 歩

【写真展示スケジュール】

12/30 (日) 13:00~2019/1/31 (木)

※よろっとローサ ☎025(378)1137

水曜定休日。詳しくは、お問い合わせください。

入場無料

有限会社ナマラエンターテイメント

☎025-290-7385 <http://namara/info>

EDGES OF THE RAINBOW

写真:ミッシェル・デルソール インタビュー:篠崎はるく

被写体の方達のプロフィール



AI HARUNA (はるな愛)

はるな愛さんは、男性の身体で生まれ、性転換手術を受け女性になったトランスジェンダー。日本を代表するポップスター・アイドル。自らの体験から、LGBTQの当事者達への理解や社会的 偏見を無くすよう、性的マイノリティーをサポートする活動に多く貢献しています。

あらゆる人種や障がい、LGBTQの当事者への理解と差別を無くすよう訴えかけるNHKの番組「バリパラ」の中で、障がいを持つ方をモデルにしたファッションショーを総合プロデュースするなど、テレビを通じて、人権を訴える活動を数多く行っています。



akta (NPO: アクタ)

同性愛者が多く集まると言われている東京、新宿二丁目にある民間のNPOと厚生労働大臣が共同で運営している機関で、主に同性同士の性行為により感染が多く見られると言われているHIV/AIDSに関する最新の情報を提供し、感染者への心のケアや相談などを行っています。

アート展や文化交流を行うイベントの企画や、教育機関、医療機関などと協力して、月に一度、ニュースレターを発行するなど情報の提供を行い、LGBTQの当事者同士が、世間の目を気にすることなく安心して 集える場所、情報の交換やネットワーク作りをする重要な機関としての重要な役割を担っています。



APOTHEKE (アポテケ)

Apotheke(アポテケ)は、エレクトロニック・ダンス・ミュージックを発信しているバンドで、音楽を通じて、LGBTQの文化を発信しています。バンド名のアポテケとはドイツ語で、薬局/薬という意味で「音楽は、薬と同様、人の心を癒す効果がある、人を癒やす場所」を意味しています。

プロデューサーのNORIさん、ダンサーと芸術監督を務めるGosukeさん、音楽監督とDJを務めるRobinさん、そして、コンポーザーのIkuoさん(ベルリン在住)達がドイツのベルリンで暮らしていた時に発足され、日本に帰国し、ボーカルのShingoが加わりました。現在、ベルリン在住のIkuoさん以外のメンバーは、大阪から単線を乗り継ぎ約1時間半の小さな村、京都府南部の山あいにある人口約2555人の南山城村で暮らしています。

高齢化や人口の減少に歯止めが効かない茶畑が広がる自然に恵まれた村で、廃校された小学校などを使いライブを行い「村の人たちと関わることで、生まれた気持ちの変化も音楽に反映されていく。村の内外をつなぐ懸け橋になりたい」と。茶畑の中に建つ築100年の瓦屋根の家屋に、LGBTQのシンボルであるレインボーカラーの旗を掲げ、地元のご老人達と共存している暮らしの中から、最先端のエレクトロニック・ダンス・ミュージックの名曲を幾つも生み出しています。プロデューサーのNoriさんは、アポテケは、音楽というツールを使った、アートプロジェクトで、それにより文化を変えていきたいと言っています。



小川チガ (CHIGA)

チガさんは、自身がレズビアンであることを長年に渡り公表し、ゲイバーで賑あう新宿二丁目にあるGold Fingerというバーを経営しています。レズビアン当事者たちが、友情や愛を育め、人目を気にせず、目と目を見つめ合える場所を作りたい、レズビアン達が自然体で居られる場所を作りたいという思いからGold Fingerを作りました。Gold Fingerは、世代を超え、常にコミュニティの中心にいて、ドラッグ・キング(男性になりたい女性)のショー、女性から男性へ性転換された人達のためのパーティなど、数多くのオリジナルの企画が行われ、ここに居れば、プライバシーが守られ、自然体で居られるという安心感が得られる場所として大盛況しています。チガさんは Gold Fingerから、徒歩で15分のアパートに愛犬と共に暮らし、グレース・ジョーンズやデビー・ハリーが大好きだそうです。



高橋佳生 (KEIKI)

佳生さんは、自称”オナベの占師”と謳っているタロットカードや易を使う占師です。女性から男性へと性転換をしたトランスジェンダーで、新潟で、Love 1 Peace というシリーズを作り、メディアなどへLGBTQへの偏見をなくすよう訴えかけています。佳生さんは、新潟市内から車で約1時間半にある胎内市の出身で、僅か13世帯のみのが暮らす小さな村で生まれ、そこで思春期を過ごしたという環境の中、自らの性の不一致に対する疑問を誰にも投げかけられずに、ただただ苦しんでいた青春時代の辛い経験から、当事者の人たちが一人で悩まないよう、新潟新聞に自らの生い立ちのエッセーを連続で書き下ろし、同性愛者への理解を呼びかけたり、月に一度、手作りの食べ物や飲み物を持ち寄り、当事者やその家族、そして、友人などのサポーター達を集い、悩みごとや疑問などの情報を交換できる場所を提供しています。幼児期は、いつも男の子とばかり遊んでいて、4歳位の時に、母親が買ってきたスカートを履きたくないに抵抗し、ハサミで切り刻んでしまったという経験を持ち、常に自分は男の子の意識を持って生きてきました。19歳頃に友達に初めて自分が性同一障がいであることを明かし、彼女も出来、20歳になった時にその彼女との失恋を機に母親にカミングアウト(自分の性の悩みを告白)します。その時の母親が言った「あなたの人生なのだから、好きに生きなさい」という言葉でとても楽になったそうです。



山本諒(まこと)・英由美(ふゆみ) MAKOTO and FUYUMI

諒さんは女性として生まれ、性転換手術を受け、男性として生きることを選択したトランスジェンダー”。諒さんの妻の英由美(ふゆみ)さんは、常に女性が恋愛の対象だったというレズビアン。お二人は11年前に知り合い結婚して5年になります(撮影時)諒さんが性転換をし、戸籍上”男性”となったことでご結婚をされ、お二人で大阪に住んでいます。お二人とも難聴のご両親を持ち、生まれながらの難聴の為、手話で会話をしています。ろう学校に通っていた中学時代に英由美さんは、いじめに合い、精神的なダメージをたくさん受けた経験をお持ちです。そんなお二人は、関西地区のろう者の為のLGBTQコミュニティーを発足、運営し、ろう者の為のLGBTQ情報交換、また、LGBTQ関連の用語を”手話で作らだし”それを手話を普及させるという大切なプロジェクトを数多く手がけ、ろう者社会の次世代に繋げる重要な活動をしています。

諒さんは小さな時から常に恋愛対象は女性で、男性からも同性として好かれないといつも思っていました。過去に、男性とも女性とも付き合った経験があり、女性といる時はいつも、男性として見られていたいと思っていました。性転換手術の後、一番に思ったことは「私が一番、私らしくなった」という思いでした。しかし今でも、自身の中で、日によって、自分は、男性なのだという感情が強い時と、女性かも知れないという両方の思いが交差すると言います。

芙由美さんはずっと、自身は、レズビアンだと思っていましたが、最近では自らの性のアイデンティティーを”Queer=クィア”と位置付けています。英語圏の言葉クィアとは元々「不思議な」「風変わりな」「奇妙な」などを表すものでしたが、現在では、セクシュアル・マイノリティ(レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスセクシュアル・トランスジェンダーなど)の人々全てを包括する言葉として用いられています。



マンディ (MANDY)

東京のナイトライフの代名詞として、その名を世界に広めている六本木。その六本木の顔として有名な六本木ヒルズの目の前にあるショーパブ ”マンディ”のオーナーのマンディさんも同性愛者。80年代にその名を芸能界にまでも轟かせた名物オーナーで、日本の母親を彷彿させる「割烹着」がとても良く似合います。六本木マンディの名を一躍有名にしたのは、バブル全盛期に「タップ・チップス」という、男性のダンサーのみで形成されたパフォーマンス集団をマンディさんが作り、お酒を飲みながら、ブロードウェイのショーさながらなの、華やかな衣装を纏った身長170センチ以上の美男子のダンサーたちが歌を歌ったり、タップを踏んだりした本格的なショーをお店で見せることで有名になりました。高校生まで北海道で生まれて育ったマンディさんは、18歳で東京に出てくるまで、スポーツに没頭するごく普通の男性で、自分の性に対して疑ったことがなかったと語ります。上京して20歳位の時に、ファッションの専門学生となり、そこで出会った女性のクラスメートが、当時、誰もが持っていなかったミシンを持っていて、学校の実技の宿題をする為に、何度もミシンを借りて彼女のうちを訪れ、その流れで、彼女と同棲することになりました。女性と暮らしていても、常に心のどこかでは、同性の男性といた方が心が落ち着くと感じるようになり、ハワイでアフリカン・アメリカンの男性と童貞を無くしたと彼女に告げ別れたそうです。



恩田夏絵・室井舞花 (NATSUE and MAIKA)

夏絵さんと舞花さんは、パートナーシップ証明書に登録した公式なパートナーです。撮影時は、夏絵さんとお父様が暮らしていたアパートに舞花さんが加わり3人暮らしをしていました。舞花さんは幼児期より自身はレズビアンだと認識していて、13歳の時の初恋も女性でしたが、同性に恋愛感情を抱いてはいけないものだと、自分の気持ちに歯止めをかけ、初恋の人には気持ちを打ち明けずにその恋は終わりました。

夏絵さんとお会いした当時、舞花さんには彼女がいて、その彼女のことで悩んでいる時に友達として悩みを聞いてくれたのが、職場の同僚の夏絵さんでした。二人は友情から恋愛対象にと5年をかけて気持ちに変化が起こり、今では互いにいなくてはならない存在です。

夏絵さんは、舞花さんとお会いする前までは、恋愛の対象はいつも男性で、舞花さんが初めての同性のパートナーでした。夏絵さんが父親に、舞花さんを女の友達ではなく、恋愛の対象者として紹介した時、お父さんは、一番初めに、舞花さんを家に連れてきた時から、二人の間に漂う空気を見てそれを感じていたと話してくれました。夏絵さんは小学校のその殆どを”引きこもり”として過ごしたという辛い経験もしました。二人は今、教育の現場からLGBTQへの意識を変えなくてはならないという信念から「Be the Change」というレクチャープログラムを作り、大学等でも、積極的に自らの体験談などの講習を行っています。



神田樹希・栄心 TATSUKI AND EISHIN

京都新聞社からご紹介されました神田樹希さんは、生まれた時に、男性とも女性とも判断がつかない性器を持って生まれ、身体的特徴から完全に男児であるとも女児であるとも判別しづらい身体ということで、“その他”=インターセックス(半陰陽児とも言います)と判断され奈良の病院で産声をあげました。幼児期よりとても活発で、いつもクラスの人気者であった樹希さんは、男性のグループで楽しいことが起こっていると、そこに男性として加わり、そのフェミニンな外見から、女子のグループにも、都合良く潜り込んでいたとご本人は語ってくれました。

思春期に、男女、両方のホルモンが身体の中で戦い、生死を彷徨う大きな手術を何度か受けられたそうです。実は、出生時に樹希さんのお母様のお腹の中には、樹希さんの双子のお姉さんがいらしたという説があり、残念ながらお姉さま

は死産だったということから、このことが、常に”性”と対話をしてきた自身の神秘的な生き方に大きな影響を与えているとお話していただき、感銘を受けました。

今は、栄心(えいしん)さんというヒーラーの奥様と京都に住み、樹希社という手作りのノートを中心としたデザイン会社を京都で経営されています。結婚する際に奥様に、自身の性のことを打ち明けた際、”樹希さんは、樹希さんだから結婚する”とおっしゃったそうです。



中村吉基 (YOSHIKI)

中村吉基さんは、日本キリスト教団 新宿コミュニティー教会の牧師で、フリーランスの編集者・ライターとしての2つの仕事をされています。ゲイであることを早くから公表し、性的マイノリティの人たちも、一般の方々も寄り添い礼拝ができる集会を毎週日曜日に、新宿5丁目にあるビジネスホテルの会議室の一室を借りて行っています。若い時からキリスト教に目覚め、カトリックの牧師になろうと勉強を始めましたが、カトリックはゲイを受け付けず牧師にはなれないと知ることを知り、今のキリスト教団体と出会います。吉基さんには、15年間連れ添っているパートナーのKさんがいますが、職場の環境からカミングアウト出来ない為、写真の撮影時に、Kさんのお顔は出せませんでした。彼とは、新宿区でパートナーシップ法が適応され、新宿コミュニティー教会の牧師の立会いのもと、公的にパートナーとなっています。吉基さんは都心の高層マンションに住み、Kさんは、吉基さんのマンションから見える向かいのマンションのほぼ同じ位の階に住んでいて、互いに仕事を持っているもの同士、この生活環境が、心地の良い距離を保っているそうです。